

序 列 副 詞

—「最初に」「特に」「おもに」を中心に—

小 林 典 子

要 旨

序列副詞とは、副詞の下位分類の一つとして筆者が提案するもので、「第一番目に」「第二番目に」というような何番目の位置に順序付けられるかを示す副詞のことである。これに属する副詞としては、他に「最初に」「次に」「おもに」「特に」などがある。これらは副詞であることから連用修飾機能があるということになるわけであるが、この副詞の修飾の機能はこれまで一般に分類されている情態副詞、程度副詞、陳述副詞のいずれとも異なる。本稿は序列副詞に対比的な取りたて機能のあることを指摘し、この機能について様々な側面から分析を加えたものである。その結果、序列副詞はその文の焦点を取りたてること、その焦点は文脈を踏まえてその文全体から判断して受け手により選ばれていることが分かった。序列副詞がこのように焦点と意味的に結合することを、連用修飾と呼べるのかどうか、あるいは、連用修飾の機能の一側面として捉えるのか、問題提起する。

1. はじめに

「序列副詞」として筆者が取り上げようとしているものは「第一番目に」「第二番目に」……「第〇番目に」というように、話題の対象が何番目に位置付けられているかを時間的な順序や評価の順序に基づいて表現する副詞のグループである。品詞論的にはこれらを副詞とみなすかどうか議論もあろうがここでは副詞的用法で使われるものを副詞と呼ぶ。同類のものとして、「最初に」「はじめに」「次に」「最後に」「まず」「真つ先に」がある。また、「特に」「ことに」「とりわけ」「わけても」「なかでも」「なかんづく」「おもに」「主として」も第一番目の位置へ評価付けるものとしてやはり序列副詞に含める。

一般に副詞は連用修飾の機能を持つもの、つまり用言相当語句を修飾限定するものと理解されており、その修飾の仕方から、情態副詞(ゆっくり、ていねいに、いそいで……)、程度副詞(大変、しばしば、かなり……)、陳述副詞(きつと、おそらく、確かに……)と大きく三分類する方法が従来からとられてきている。近年、さらに下位分類が進み、例えば情態副詞の下位分類として結果の副詞(びかびかに、きれいに、粉々に……)や評価付けの副詞(あつげなく、烈しく、上手に……)(仁田 1983)など新たな副詞のグループが取り上げられ、連用修飾とはどのような機能であるかがより明確になりつつある。

ところで、序列副詞、「最初に」「特に」「おもに」のようなある種の副詞は上記の副詞分類のいずれにも含め難い。次の例文をみてみよう。

(16) 序 列 副 詞

- (1) この町の春は最初に海からやってくるようであった。(人間の壁)
- (2) わが家ではおもに白黒テレビを見ることにしている。(朝日 11/12/'86)
- (3) 「私はだいぶん家庭を犠牲にしてきたな。特に今は社会人の二人の子育てには後悔がいっぱいある。」(朝日 5/6/'86)

(1)では「最初に」は「海からやってくる」を連用修飾していると統語的には説明されることになるが、これは情態副詞のように述語動詞の様態を修飾しているのではない。つまり「やってくる」という行為の仕方をくわしく述べてその属性を限定しているのではない。あるいは、結果の副詞のように行為の結果を示して、用言を限定するものでもない。また、程度副詞のように用言を量的に限定しているというわけではない。陳述副詞はコト(叙述内容)の内容の増減に関わることなく、コトの外側のムード(話者の心的態度)に係って、発話者のコトに対する主観的な判断や注釈といった認定の仕方や態度を表明するものである。「最初に」も発話者による判断を表明しているとみなせ、この点で陳述副詞に近い。ところが、「最初に」はコトの内容自体に関わるものであり、その点で、陳述副詞とは異なる。このように、「最初に」は、従来の「情態」「程度」「陳述」といった連用修飾の類型からは、はみ出してしまうようである。同じことが、(2)の「おもに」、(3)の「特に」についても言える。これらの副詞はいったいどのような修飾の仕方をしているのであろうか。

(1)の「最初に」は連用修飾でありながら、意味内容上は、「海から」という名詞句に結びついていると解釈できるだろう。春が到来してきそうな所や物と比べてどれが一番はじめか順序付け、それが「海」であることを表現しているのである。

(2)の「おもに」も「見る」の様態を修飾しているのではなく、「白黒テレビ」を「カラーテレビ」と比べて「白黒テレビ」を第一番目に順序付けているのである(参照①)。あるいは「白黒テレビを見ること」が他の行為、例えば「ラジオを聴くこと」などと比べられて順序付けられている(参照②)とも解釈できよう。

①わが家ではおもに〈白黒テレビ〉を見ることにしている。

②わが家ではおもに〈白黒テレビを見ること〉にしている。

〈 〉が順序づけられている要素)

「おもに」がどの要素に結び付くか、①となるか②となるかは文全体のみならず文脈も踏まえて読み手がどのようにその文を読み取るかによる。つまりその文が最も伝達しようとしている部分(以下「焦点」と呼ぶ)が何であるかと関係してくるのである。

(3)の「特に」もまた、次のように二義の解釈ができよう。

①特に〈今は社会人の二人の子育て〉には後悔がいっぱいある。

②特に〈今は〉社会人の二人の子育てには後悔がいっぱいある。

①では話者が後悔している「家庭の犠牲」のいくつかの中で第一番目の犠牲が「今は社会人の二人の子育て」であると順序付けているし、②では「特に」は「今」に結び付いて「後悔の時」を昔、去年、等と比較して「今」を第一位に順序付けていると解釈できる。

このように、これらの副詞は統語的には連用修飾とされているが、意味内容上は、順序付けようとする文の要素に結び付きそれを取りたてて機能をもつものではないかと考えるのである。なお、ここでいう「取りたて機能」を次のように定義しておく。

取りたて機能：文中のある要素に読み手や聞き手の注意を引き付け、その要素を暗黙のうちと比較の対象と了解されるカテゴリーの中で順序付けることにより、対比的に際立たせる機能である。「対比的に」ということは「取りたてられている」要素が「取りたてられない」ほかの要素を暗に示して対比しているということである。

この定義を例文(1)に当てはめてみると、「最初に」は「海から」という文要素に読み手や聞き手の注意を引き付け、これを暗黙に他の対象（「山から」「町から」など）と比べ「海から」を第一番目に順序付けることによって対比的に際立たせている。すなわち第二、第三番目に他の場所からも「春がやって来る」ことを含意していると説明できる。

本稿はこのように文の焦点と結合する「序列副詞」の取り立て機能を副詞の機能の新たな類型として提案し、考察するものである。

2. 先行研究

筆者が序列副詞と称するものが先行文献でどのように扱われているかをみてみよう。

森重敏^{注4} (1959) は「間投副詞」「係副詞」「接続副詞」「並立副詞」「群数程度量副詞」をそれぞれ間投助詞、係助詞、接続助詞、並立助詞、副助詞といった助詞の類型と対照させて体系付けているが、この中で序列副詞は「並立副詞」(また・ただし・そもそも・それとも・はた・あるいは・または・もしくは・ならびに・およそ・まず・はじめに・つぎに・最後に・なお・ちなみに・おって)と「群数程度量副詞」の中の〈特指〉の下(なかんずく・とりわきて・ことに・特に・まづ・むねと・ただに)で取り上げられている(下線は筆者が序列副詞とするもの)。

「群数副詞」については「相対する要素が作用的に種々に働きあう、その作用性を主として群を見るという意味把握に基づいているといえる。」(前掲 p.247) と説いている。難解な森重の論を正しく解したという自信はないのだが、これは、筆者が「取り立て機能の定義」で前述した「カテゴリーの中での対比」と関係していると考えられる。注目すべき点はこれらの副詞のそれぞれに対応する並立助詞と、副助詞が、「一項を〈明指〉することで他項を〈暗指〉する働きをする」(前掲 p.240) という指摘である。これらの助詞と意味上対応するとされる並立・群数副詞もまた当然〈明指〉〈暗指〉の機能を持つとされ、これは序列副詞の取り立て機能と通じるものである。

ただし、「並立副詞」の「まず・はじめに・つぎに・最後に」については、「文乃至文以

(18) 序 列 副 詞

上の連文を並立の対象・要素・項として、段階的に序列づけるもの」(前掲 p.238)としており、文以上の単位の並立に関係するものとして捉えているが、序列副詞のように文中の一要素(句や語)を取りたてるとこのような見方はしていないようである。

工藤^{注5}浩(1977)は「限定副詞」(工藤^{注6}1982では「取りたて副詞」と呼び変えられている)という分類をたて、これが名詞句を取りたててることを指摘し以下のような副詞の整理をしている。

- A. 排他的限定(ただ、単に、もつばら、ひとえに)
- B. 選択指定(まさに、まさしく、ほかでもなく)
- C. 特立(特に、ことに、取り分け、分けても、なかんずく、なかでも)
- D. おもだて(おもに、主として)
- E. 例示(例えば)
- F. 比較選択(むしろ、どちらかといえば、いっそ)
- G. 類推(いわんや、まして)
- H. 見積り方・評価(少なくとも、せめて、せいぜい、たかだか、たかが)

限定副詞は渡辺実の「誘導^{注7}副詞」に端を発するものである。上記の限定副詞も、隣接する語を誘導し取りたてた副詞が収集され、意味的な側面によって分類整理されたものと言えるよう。序列副詞はこの限定副詞のC、D、に含まれている(下線)。

また鈴木重幸^{注8}(1972)は、「特に」「とりわけ」「ことに」「なかんずく」を「取り立ての意味」を持つものだと述べ、これらが程度副詞に近いと言及している。

森重(1959)は並立助詞、副助詞と関連させて数の概念の観点から、鈴木(1972)は程度副詞と関連づけて数量的な限定という観点から、また、工藤(1977)は渡辺の誘導という観点からそれぞれの文法論を背景に類型化したといえよう。序列副詞はこれらのいずれかに帰属することになるのかもしれない。しかし、並立副詞、群数副詞、限定副詞のいずれにもかなり多様な種類の副詞が含まれており、森重(1959)の「作用性を主として群を見るという意味把握」や工藤(1977)の「取りたて」がみな一様な連用修飾の機能であるとは考え難いのである。

そこで現時点では、文の焦点と結合する取りたて機能に関して統語的特徴を考察するために、序列副詞を独自のグループとし、これについて論じることにする。

3. 序列副詞の作用域と焦点

序列副詞の機能を考察するにはその機能の及ぶ範囲と機能の特性の二点が議論されなければならない。第一節で、序列副詞はコトの内に機能し、文の焦点に結合すること、また、その機能特性は取りたてであることを指摘した。本節ではまず機能の領域について言及する。

ここでは副詞が係って意味内容を支配している範囲を作用域と呼び、また、序列副詞が

取りたてる対象を焦点と呼ぶことにする。^{注9}

- (4) 最初に花子は [赤い] スイッチを押し、次に [白い] スイッチを押しに違いな
い。
(5) 最初に花子は [赤いスイッチを押し]、次に [ダイヤルを回した] に違いない。

(4)(5)は、二重下線部がそれぞれ「最初に」と「次に」の作用域であり、[]内がその焦点である。(4)では「最初に」は「押し」までを作用域とするが「赤い」という焦点に結び付きこれを他の色と対比して取り立てている。(5)は焦点の範囲が作用域と一致した例である。このように焦点がもっとも広い場合が作用域全体ということになる。また、「違いない」というムードの部分は「最初に」「次に」の作用域ではない。序列副詞は陳述副詞や文副詞のようにコトの外、つまり、ムードに関するのではないといえる。

作用域が文全体と広い場合は接続詞ようになる。例えば、挨拶のスピーチの中で使う次の例がそうである。

- (6) 最後に [皆さま御静聴ありがとうございました]

読み手は(4)(5)の前半部分を読んだだけではそれぞれの焦点を決められない。後続の「次に」以下を読んで初めて「最初に」が何を順序付けているのか分かるのである。(4)と(5)の前半は互いに同じ文であるが、「最初に」の係っている焦点が異なるため、「最初に」が表現する内容は違っている。このように序列副詞の作用域と焦点は文全体あるいは文脈によって決定される点に特徴があるといえる。序列副詞は談話レベルからの判断なくしてはその意味が明確にならないのである。

4. 取りたてと対比

序列副詞は文の焦点と結び付きそこを取りたてる機能を持つものではないかと第一節で述べた。このような副詞が連体節の中に入っている場合はどうなるのか検討することによりその取りたて機能を検討してみよう。

例文(7)の装定を翻して述定にすると(8)、(9)の文ができるがその時、(7)における「最初に」の修飾機能と(8)、(9)におけるそれとは同じではない。

- (7) 最初に花子が行ったデパートは日本橋の三越だった。
(8) 最初に花子はデパートへ行った。
(9) 最初に花子がデパートへ行った。

(7)の「最初に」は花子が行ったいくつかのデパート、例えば、高島屋、三越、伊勢丹

(20) 序列副詞

など、というデパートの種類を対比のカテゴリーとし、その中でどこに最初に行ったかの順序を表現していると解釈できる。ところが、(8)では、デパートというカテゴリーの中での順序付けではない。花子が出かけて行きたいいくつかの行き先（例えば、銀行、友人の家など）の中で「デパート」が第一番目の行き先であると表現しているように解釈できる。あるいは、花子の諸々の行為（例えば、食事をした、テニスをした、など）の中での順序付けとも解釈できる。(9)の場合はデパートへ行った人（例えば、太郎や、良子など）の中で誰が最初に行ったのかが問題にされていると解釈できる。

「最初に」という副詞そのものの潜在的な意味は一つであるのに、何と対比しているのか、という対比のカテゴリーにより「最初に」が順序付けようとする内容はこのように異なる。対比のカテゴリーは何が取り立てられるかによって決まるが、読み手や聞き手はその文あるいは連体節の中の焦点を捜し、これを取りたてようとするのではないかと考える。(8)の場合、「デパートへ」が焦点の場合は行き先のカテゴリーでの対比、「デパートへ行った」が焦点の場合は花子の行為のカテゴリーでの対比となる。

このように何が焦点であるかによって対比のカテゴリーが変化するのは、「最初に」だけでなく「特に、おもに、第一番目に、」など他の序列副詞にもいえることである。例えば例文(10)、(11)の〔 〕が焦点だとすると対比のカテゴリーは()に示されているようになるが、(12)、(13)の連体節の中ではそれが変化している。

- (10) おもに太郎は〔歴史小説〕を読んだ。(推理小説、恋愛小説など小説の種類)
- (11) 特に太郎は〔日本酒を〕飲んだ。(ウイスキー、ビールなどお酒の種類)
- (12) おもに太郎が読んだ歴史小説は司馬遼太郎のものだ。(吉川英治や山岡荘八などの歴史小説の種類)
- (13) 特に太郎が飲んだ日本酒は熱すぎた。(何本かならんだ徳利)

このように序列副詞は文の焦点を取りたて、その取りたては対比をとまなうものであると言える。そのため、装定表現とそれを翻してできた述定文では序列副詞の意味している内容が異なってくるのである。

5. 序列副詞と他の副詞との比較

副詞を含む文が述定の場合とそれが装定表現になった場合とで、その副詞の係り方（作用域）がどのように変化するのか、しないのかを様々な類型の53個の副詞（工藤1977、中右¹⁰1980、仁田1983の各分類からの代表的なもの）、について調べてみた。その結果をもとに序列副詞と他の副詞を比較しながら、序列副詞の特徴を明らかにしていこう。

5.1. 情態副詞との違い

例文(14)の序列副詞は「蹴った」を連用修飾しているとされるが、これらの副詞はどのような修飾の機能を果しているのであろうか。蹴り方の様子が「最初に」であるとか、「特

に], であるとか, 「おもに」であるというような様態描写の機能は果していない。これに対して(15)の「すばやく」「そっと」「強く」といった情態副詞は蹴り方が「すばやく」「そっと」「強く」であったと様態を詳述して蹴った内容を限定している。

- | | | | | | | |
|-------------|---|-------------|---|------|------------|------------|
| (14) | <table style="border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="padding-right: 1em;"><u>最初に</u></td> <td rowspan="3" style="font-size: 3em; padding: 0 5px;">}</td> <td rowspan="3" style="vertical-align: middle;">蹴った。</td> </tr> <tr> <td style="padding-right: 1em;"><u>特に</u></td> </tr> <tr> <td style="padding-right: 1em;"><u>おもに</u></td> </tr> </table> | <u>最初に</u> | } | 蹴った。 | <u>特に</u> | <u>おもに</u> |
| <u>最初に</u> | } | 蹴った。 | | | | |
| <u>特に</u> | | | | | | |
| <u>おもに</u> | | | | | | |
| (15) | <table style="border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="padding-right: 1em;"><u>すばやく</u></td> <td rowspan="3" style="font-size: 3em; padding: 0 5px;">}</td> <td rowspan="3" style="vertical-align: middle;">蹴った。</td> </tr> <tr> <td style="padding-right: 1em;"><u>そっと</u></td> </tr> <tr> <td style="padding-right: 1em;"><u>強く</u></td> </tr> </table> | <u>すばやく</u> | } | 蹴った。 | <u>そっと</u> | <u>強く</u> |
| <u>すばやく</u> | } | 蹴った。 | | | | |
| <u>そっと</u> | | | | | | |
| <u>強く</u> | | | | | | |

(14)は「蹴った」動作主を他の人と対比し順序付けているともとれるし, 「蹴った」という行為と対比して, 「最初に蹴った, 次に殴った,」というように順序付けているようにもとれる。

- | | | | | | | |
|------------|---|------------|---|---------|-----------|------------|
| (16) | <table style="border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="padding-right: 1em;"><u>最初に</u></td> <td rowspan="3" style="font-size: 3em; padding: 0 5px;">}</td> <td rowspan="3" style="vertical-align: middle;">太郎が蹴った。</td> </tr> <tr> <td style="padding-right: 1em;"><u>特に</u></td> </tr> <tr> <td style="padding-right: 1em;"><u>おもに</u></td> </tr> </table> | <u>最初に</u> | } | 太郎が蹴った。 | <u>特に</u> | <u>おもに</u> |
| <u>最初に</u> | } | 太郎が蹴った。 | | | | |
| <u>特に</u> | | | | | | |
| <u>おもに</u> | | | | | | |

(16)では, 動作主「太郎」を他の人と対比し順序付けをし, 一番目には太郎, 二番目, 三番目には誰か他の人が蹴った, という意味に理解するのが自然である。統語的には「蹴った」に係り連用修飾をしていると説明されるが, 意味内容の上では, 「太郎が」に焦点を置き, これと結合していると言える。

- | | | | | | | |
|------------|--|----------------|---|----------------|-----------|------------|
| (17) | <table style="border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="padding-right: 1em;"><u>最初に</u></td> <td rowspan="3" style="font-size: 3em; padding: 0 5px;">}</td> <td rowspan="3" style="vertical-align: middle;">太郎は一郎のボールを蹴った。</td> </tr> <tr> <td style="padding-right: 1em;"><u>特に</u></td> </tr> <tr> <td style="padding-right: 1em;"><u>おもに</u></td> </tr> </table> | <u>最初に</u> | } | 太郎は一郎のボールを蹴った。 | <u>特に</u> | <u>おもに</u> |
| <u>最初に</u> | } | 太郎は一郎のボールを蹴った。 | | | | |
| <u>特に</u> | | | | | | |
| <u>おもに</u> | | | | | | |

(17)においては, 「一郎のボールを第一番目に蹴った, 二番目には二郎のボールを蹴った」というように, 「一郎のボール」を他の「蹴る」対象物と対比させて順序付ける解釈が一般的だろう。その中でも特に「一郎の」に焦点を置き他の人のボールと対比して解釈する傾向が強いようである。また, 「特に」は「太郎は」を取り立てているとも解釈できる。

次に情態副詞の機能をみてみると, (18)(20)の述定文でも(19)(21)の装定表現でもその機能は変化していないと考えられる。いずれの場合も「のろのろと」は動詞「書いた」に係ってこの様態を描写している。

- (18) のろのろと文字を書いた。

(22) 序列副詞

(19) のろのろと書いた文字 (はミミズが這ったような字だった。)

(20) あっけなく彼は死んでしまった。(仁田 1983)

(21) あっけなく死んでしまった彼 (は莫大な借金を抱えていた。)

このように、序列副詞は情態副詞とは異なり、用言の素材的成分の様態を描写するものではないと言える。もし、用言の素材的成分の意義的側面を詳しく述べて限定することが、修飾であると言うのであれば、序列副詞に連用修飾の機能があるとは言えなくなる。

5.2. 程度副詞との違い

序列副詞は一番目、二番目という順序を示す点で、数に関係するのであるが、数量に関する程度副詞とはかなり異質なものと考える。程度副詞は用言を量的に限定する属性副詞であるが、序列副詞は用言を量的に限定するものではなく、文の焦点を取り立てるものである。ただ、程度副詞が極端な量を示すときこれは強調に働き被修飾語を際立たせる結果を生むが、このような強調された際だちは序列副詞による取りたてによる際だちと似通ってくることになる。しかし、強調による際だちと取りたてによる際だちは本質的に異なる。(25)～(27)のように程度副詞の強調は単に量を示しているのであって対比を産まない。それに対して(22)～(24)の序列副詞は対比を産むものである。

(22) 特に太郎は新聞のスポーツ欄を読んだ。

(23) おもに花子はポチに残飯をやった。

(24) 最初に太郎は一郎の右足を蹴った。

(25) ほんの少し太郎は新聞のスポーツ欄を読んだ。

(26) いつも花子はポチに残飯をやった。

(27) 何度も太郎は一郎の右足を蹴った。

このように、序列副詞は対比的な取りたてをするものであり、取りたてないものを暗示することにより取りたてるものを強調する。これに対して程度副詞は程度や頻度の量的な限定が強調の効果を生んでいるのである。

5.3. 陳述副詞との違い

序列副詞と陳述副詞との決定的な違いは陳述副詞がコトの外(ムード)に係るのに対して序列副詞はコトの内容を叙述する成分である点である。このことは連体節内に含まれるかどうかを比較しても明らかとなる。コトの外側に係る性質のため(29)(31)の「もちろん」「多分」は連体節内には係らず、文末の「だろう」と結合している。(28)～(31)をそれぞれ「最初に」「特に」「おもに」に入れ換えた(32)～(35)と比較してみよう。

- (28) もちろん太郎は車を買うだろう。
 (29) もちろん太郎が買う車 (は中古車だろう)。
 (30) 多分彼が来るだろう。
 (31) 多分彼が来る (日は雨だろう)。
- (32) 最初に (特に/おもに) 太郎は車を買うだろう。
 (33) 最初に (特に/おもに) 太郎が買う車 (は中古車だろう)。
 (34) 最初に (特に/おもに) 彼が来るだろう。
 (35) 最初に (特に/おもに) 彼が来る (日は雨だろう)。

序列副詞の場合はムードと関係するのではなくコト内の要素を取りたてていることが分かる。(32)では「車」を買いもの品目のカテゴリー内で順序付けて対比し、(33)では「太郎が買う車」を色々な車の種類の中で対比させている。

ところで、序列副詞はムードに係るものではないが、その順序付けは発話者の判断によるものである。発話者の判断を表現しているという点で陳述副詞と似ていると言える。しかし陳述副詞が発話者の主観的な判断を示すのに対して序列副詞はより客観的な態度でコトを判断している点が異なる。序列副詞の中には、より客観的なものから、より主観的なものまで多少の傾斜はあるものの、客観的な順序付けをする副詞といえよう。

このことを互いに意味の似通った「最初に」と「まず」を比較することで次に検討する。

「まず」には、1)第一に、最初に、2)ともかく、何はともあれ、3)大体、のような意味があるとされて^{注12}いる。「まず」は、1)の意味の場合、序列副詞とみなせるが、2)、3)は発話者の主観、気分を表現するものであって、きわめて陳述副詞に近く、序列副詞とは考え難い。この場合は序列副詞のように対比されるものが想定できないのである。

- (36) まず一步踏み出してみる。そこから始まります。(朝日の広告8/24/'86)
 (37) 準備委員会は、借金してでもまず発足させる方針だが、安定した運営ができるよう各方面の積極的な協力を呼びかけている。(朝日6/7/'86)

上の例文の「まず」はいずれも2)の意味であり、序列副詞ではない。それは、対比のカテゴリーが存在しないことから「最初に」の場合とは違う。(36)の「まず」は「踏み出す」という行為の取り掛かりにのみ関心を払い、次に続く行為に頓着していない。次に何をするか想定できない。このことは(37)でも同様である。

「最初に」の場合と比較してみよう。

- (38) ……雑賀さんが、最初に島へ渡ったのは愛知県の芸術大学デザイン科在学中の49年1月。(朝日6/6/'86)
 (39) 最初に買ったレコードがカーペンターズでした。(朝日6/14/'86)

(24) 序列副詞

(38)(39)はそれぞれ「二度目、三度目……に島に渡った時」、「二回目、三回目……に買った他のレコード」と対比されていることが想定できる。このような例からも序列副詞が対比的な取り立てをするものであり、客観的な判断を表現するものであると言えるのではないだろうか。

5.4. 限定副詞との違い

第2節でも述べたとおり、序列副詞は先行文献でみられる副詞の中では限定副詞に近いものである。しかし、何を取り立てられるのか、といった取り立ての対象に関しては、異なっていると考えている。工藤(1977)にあげられている限定副詞の用例をみる限りではいづれも隣接する語句を誘導し取り立てるという観点に立つものようである。そのために何が隣接するかという語順の支配が強い。これに対して序列副詞はその文の焦点と結合してこれを取り立てるという観点に立つものである。

限定副詞が隣接するものに係ることを、連体節内でみてみよう。

(40) むしろ [パソコンを] 買う方がいい。

(41) むしろ [買う方が] いいパソコン

(42) 単に [プレゼントを] 贈っただけだ。

(43) 単に [贈った] だけのプレゼント

(40)～(43)の下線部の副詞が隣接の語句 [] に係ってしまうのが分かる。

また、同じく限定副詞にあげられている「例えば」は、(44)(45)に見られるように連体節内に留まりきれず、その文の一番外側の用言に係る。これは文副詞や接続詞のようにコトの外まで作用域があるためと言えよう。

(44) 例えば [鰯は健康によい]。

(45) 例えば [健康によい鰯 (があまり食べられていない。)]

6. 取りたての焦点についての実態調査

6.1. 焦点決定条件の仮説

序列副詞が取り立てる対象は隣接しているものとは限らず、取りたてようとするその文の焦点であると先に述べた。本当にそうであるのか、また、取りたてられる焦点はどのようなものか、調べてみる必要を感じ、読み手や聞き手が焦点を決定する条件を探る実態調査を試みた。これは厳密な統計調査ではないが、次のような仮説を支持する傾向が得られた。

〈仮説〉

1. 「が格」の名詞句を第一優先順位で取りたてる。
2. 語順
 - a. 序列副詞が文頭ではなく文中に入った場合はこれに隣接する要素が取りたてられやすい。
 - b. 序列副詞が文頭の場合は文頭に近い要素よりも文末の述語動詞に隣接する要素の方が取りたてられやすい。
3. 相対的により個別的、具体的な表現に寄与する語句が取りたてられる。それはより周辺の要素であることが多い。言い替えれば、意味の階層レベルのより下位にある語、分岐する名詞句の先端にあたる語などが取りたてられやすい。

6.2. 取りたてのテスト

下に示すテスト1と2のような二種の形式を含むテストを補語の数、語彙、語順などの条件を変え、調べた。条件の少しずつ異なる似た文は別々のグループでテストするようにするため、設問を分散して行った。各グループは約20人で9グループに実施した。

テスト1

テスト1は「どこを強調して読みましたか？」という質問をして強調した部分を番号で答えさせた。例えば、

特に $\frac{\text{道子は}}{(1)} \frac{\text{ヘンデルの}}{(2)} \frac{\text{曲が}}{(3)} \frac{\text{好きだ。}}{(4)}$

の場合は(2)「ヘンデルの」が92%の人によって選ばれた。これは「特に」が「ヘンデルの」を取りたてていると解釈した人が大部分であったことを示しているといえる。これを語彙を変えて「曲」を「宗教音楽」としたら、表1の()のように「ヘンデルの」:「宗教音楽」が60:36(%)の比率で取りたてられ、「メサイヤ」としたら「ヘンデル」を選んだ人は0%となり、「メサイヤ」が92%という結果となった。

表1

特に道子は $\left\{ \begin{array}{l} \text{ヘンデルの曲 (92:0)} \\ \text{ヘンデルの宗教音楽 (60:36)} \\ \text{ヘンデルのメサイヤ (0:92)} \end{array} \right\}$ が好きだ。

テスト2

テスト2は「(1)に続けて「次に」で始まる(2)の文を完成させて下さい」と指示して

(26) 序 列 副 詞

次の例のような設問をした。

(1) 最初に花子は道子のスカートを縫った。

(2) 次に

(2)に続く文としては

a 花子は自分のスカートを縫った。

b 花子は道子のブラウスを縫った。

c 花子は自分のブラウスを縫った。

d 花子は食事の用意をした。

というようなものが様々自由に出てくる。このような回答から、推量して、「最初に」が取りたてた焦点を探ってみた。例えば a であれば、「誰のスカート」が問題にされて「道子の」、bでは、「スカートを」、cでは、「道子のスカートを」、dでは「道子のスカートを縫った」がそれぞれ取りたてたの焦点と判断した。この結果は、表2のスカートの欄のとおりである。また、「スカート」を「洋服」に変えた別のグループによるテスト、

(1) 最初に花子は道子の洋服を縫った。

(2) 次に

の結果は表2の洋服の欄のとおりである。これは「スカート」が「上着」「ブラウス」といったセットになるものと対比され易いのに対して、「洋服」の方は、そのようなセットが思いつきにくく、そのため「道子の」のほうに焦点が傾斜したのではないかと考えられる。

表2 「最初に花子は道子の { スカート / 洋服 } を縫った。」における取りたてたの焦点

スカート		洋 服	
a 道子の	32%	a 道子の	67%
b スカートを	36	b 洋服を	5
c 道子のスカートを	12	c 道子の洋服を	5
d 道子のスカートを縫った	8	d 道子の洋服を縫った	19

上記のテストは語彙の意味と焦点の関係をみた一例であるが、他にも、語順、補語の数、などと焦点の関係を同じ形式のテストで調べた。その詳細の報告は紙幅の都合でできないが、この取りたてのテストによって、序列副詞が必ずしも隣接している要素を取りたてているのではなく、その文の焦点と結合してそこを取りたてること、その焦点は構文、語彙の意味、語用論的知識をも必要とする情報の重要度など様々な影響のもとに決定されていること、が分かった。

7. むすび——序列副詞の位置づけ

中級レベルの留学生に「はじめて」と「はじめに」のいずれを挿入するのが正しいか次のような文で問うたところ、解答に二者の混乱が見られた。

- ①失ってみて（ ）自由のすばらしさがわかった。
- ②高田先生にお会いするのはこれが（ ）だ。
- ③皆集まったから（ ）ビールで乾杯しよう。

「はじめに」が順序づけの序列副詞であり「はじめて」が用言の属性を限定する情態副詞であるという違いが区別されていないための間違いであろう。

他にも「とりあえず」「ついに」「第一」「あらためて」などのような、順序、数量に関する副詞があるが、これらは序列副詞とはしない。単に順序、数量といった意味的側面での分類だけでは同一になってしまうかもしれないが、取り立て機能や、その及ぶ作用域と焦点といった機能的側面から検討すると、序列副詞とは異なる。例えば「一番・きわめて」は程度副詞、「あらかじめ・あらためて・はじめて・すでに・ついに・とりあえず」は用言の起こり方を修飾限定する情態副詞、「第一、太郎は頭がいいではないか。」の「第一」は陳述副詞(文副詞)というように分けられるのではないかと考えるが、どちらも決めかねる副詞もまだ多く、今後更に検討しなければならない。

序列副詞の特徴を見るために、副詞を含む文が述定の場合とそれが装定表現になった場合を比較したが、これらを整理してみると、副詞の係先を変化させないで用言の素材的成分だけに係っていると解釈可能なのは「のろのろ」のような情態副詞であった。一方、副詞の係り先の変化の仕方としては三つ考えられた。第一は、作用域がコトの外側にまでわたる性質のため連体節に収まりきれない場合である。陳述副詞とか文副詞といわれる「もちろん」「おそらく」や、限定副詞の「例えば」などがそうである。第二は、語順による影響のため連体節で係り先が変わるもので、多くの限定副詞がそうである。「むしろ」「単に」のいずれも直後に隣接している語に係っている。第三は、取り立てられる要素の対比の категорияが述定文と連体節では異なる場合で序列副詞がそうである。

こうしてみると、序列副詞は陳述副詞のように連体節の外へ出ようとはしないで、連体節に収まるものであること、限定副詞の多くのように隣接する語と結合するとは限らず取りたてようとする焦点と結合するものであること、連体節では対比の категорияが変化するため意図が変わること、情態副詞のように用言の素材的成分だけを修飾するものではないこと、がわかる。

そこで、序列副詞の構文論的特徴として以下の6点を挙げる。

- a. 用言の素材的成分を修飾限定しているのではない。
- b. 順序付けをした上で、対比的に取りたてる副詞である。

(28) 序列副詞

- c. 取りたてる対象は直接隣接している語句とは限らず、文全体や文脈などから決定されるその文の焦点である。
- d. 文全体に関わる副詞ではあるが、コトの内容を左右する。
- e. 順序付けは発話主体による判断であるが、客観的なものである。

副詞の作用域がコトの内か外かという観点から整理すると、

コト内	コトの様態の限定……情態副詞 (属性副詞)
コト内	コトの量的な限定……程度副詞 (")
コト外	発話者のコトに対する態度の限定……陳述副詞・文副詞

というのが従来の図式である。ところが、序列副詞は属性でも陳述でもなく、以上の三分類には収まりがたい。事実としてはコト内であるが、その係り先は談話レベルから決定される焦点である。従ってあえて、以下のように、

コト外→内 発話者の判断によるコト内の要素の取り立て

として独立して位置づけるしかないのではないだろうか。序列副詞のこのような取りたて機能は格関係や、修飾—被修飾の関係といった従来の統語論では説明が難しい。談話レベルを取り込んだ文法論が必要なのではないだろうか。

注 1 山田孝雄 1908『日本文法論』の副詞分類を基に一般的にはこのように三分類されているが、陳述副詞については各文法家によって差異がある。本稿でいう陳述副詞は山田に沿うもので、北原保雄 1981『日本語の世界 6 日本語の文法』の叙述修飾成分と陳述修飾成分、中右実 1980『文副詞の比較』『日英語比較講座 第2巻 文法』の文副詞、などを含む広い意味で使っている。しかし渡辺実の分類による陳述副詞は含まない。

注 2 仁田義雄 1983「動詞に係る副詞的修飾成分の諸相」『日本語学』2-10, 明治書院

注 3 Joseph Taglicht.1984. "Message and Emphasis-On Focus and Scope in English". Longman は adverbial focus に関して only を例に focus を当てているということは anti-focus を implicature するものであると、論じている。このような対比は日本語の副助詞(は、も、こそ、さえ、等)の対比の機能と同じであり、森重敏 (1959) にも言及されている。

注 4 森重敏 1959『日本文法通論』風間書房 pp.197~268

注 5 藤澤浩 1977, 「限定副詞の機能」『国語学と国語史』, 明治書院

注 6 ……1982, 「叙法副詞の意味と機能」『国立国語研究所報告 71 研究報告集 3』

注 7 前掲の工藤 1977, は以下のような指摘をしている。

「…副詞の下位区分の一つとして「限定副詞」を立てたのは、渡辺実 1957「品詞論の諸問題—副用語・付属語—」『日本文法講座』が最初で、「せめてこの子にだけはこんな苦勞をさせたくありません。」の例をあげて、「ある語の表す素材概念を限定し、その素材に対する話し手の価値評価を表す一群である」と規定し、「いわば、概念誘導の副用語」だとも述べている。

渡辺 1971『国語構文論』では誘導副詞の一種として、「せめて」「おまけに」の二例があげられている。また、市川孝1976「副用語」(岩波講座『日本語6文法1』)では「限定の副詞」として、「むしろ」「まして」が取り上げられている。

注 8 鈴木重幸 1972『日本語文法 形態論』麦書房 p.478

注 9 本稿の「作用域 (scope)」「焦点 (focus)」は、沢田治美「日英語文副詞類の対照言語学的研究」『言語研究』74 の定義に従う。

注 10 中右実 1980「文副詞の比較」『日英語比較講座第2巻文法』大修館書店

注 11 この傾向は第六節で述べるテストに見られた。

注 12 明解国語辞典 1982

注 13 被験者 190 人は図書館情報大学と筑波大学の男女学生

〈付記〉

本稿は昭和62年1月に提出した筑波大学地域研究研究科修士論文の一部を書き改めたものである。指導教官の湯沢質幸先生、草薙裕先生、佐久間まゆみ先生の御指導を深く感謝します。また寺村秀夫先生から貴重な御教示を頂きましたことを記して心から謝意を表します。

——筑波大学留学生教育センター非常勤講師——

(昭和62年6月24日 受理)

(昭和62年10月19日 改稿受理)